関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

清代中国に漂着した琉球民間船の帰国方法

著者	岑 玲
雑誌名	東アジア文化交渉研究 東アジア文化研究科開設記念号
ページ	369-384
発行年	2012-03-24
その他のタイトル	Returning Methods of Rykyu's Drifting Ships in the Qing Dynasty
URL	http://hdl.handle.net/10112/7383

清代中国に漂着した琉球民間船の帰国方法

岑　　玲

Returning Methods of Rykyu's Drifting Ships in the Qing Dynasty

CenLing

The communication between Ryukyu・Okinawa and China has a long history. It has been said that the history has begun even at Ming Dynasty. Ryukyu Dynasty were canonized by Chinese king even after Satsuma clan(now Kagoshima Prefecture)'s invasion in the beginning of 17 century. The tributary relations between Ryukyu and China had last for 5 centuries until Ryukyu became Okinawa Prefecture by Meiji Japanese government in 1872.

The relationship between China and Ryukyu basic were tributary relations. However, the main transportation mean in Ryukyu were by ship, and lots of ship encountered typhoon, lost control of their ship, and finally were drifted to China continent. You can refer to these historical documentation in the book「Selected documentation of China-Ryukyu relations in Qing Dynasty」which was public by China First Historical Archives. Lots of ship-drift cases are written in this book from Qianlong era to Guangxu era of Qing Dynasty.

Various forms of transportation can be found form those cases. This paper will not focus on tributary ships from Ryukyu, but on the part of rescue and aid from Qing government to those who were drifted from Ryukyu.

キーワード：　清代中国　琉球民間船　漂着　帰国

一　はじめに

琉球・沖縄と中国との間の交流には永い歴史がある。その歴史は明初からが始まったと言われる[1)]。琉球王朝は中国の皇帝に国王位の冊封を求め、17世紀初めに琉球が薩摩藩（現鹿児島県）島津による侵入を受けても中国の皇帝に冊封を求めた。1872年に明治日本政府により琉球国が沖縄県となるまで5世紀にわたり中国と琉球との朝貢関係が続いた。

清朝中国と琉球国との朝貢貿易は、琉球国から主要な朝貢品である硫黄を含む多くの物品が中国にもたらされ、中国から返礼として中国産の絹織物や陶磁器などが与えられた。この朝貢貿易は、琉球の那

1）小葉田淳『中世南島貿易史の研究』日本評論社、1939年9月、第二章参照。謝必震『明清中琉航海貿易』海洋出版社、2004年3月、第一章参照。

覇から朝貢品を積載し福建の福州にもたらし、また中国からの返礼品を那覇にもたらしたのは、琉球の朝貢船であった。このように長く続いた中国と琉球との関係は、多くの研究によって明らかにされている[2)]。

海洋国琉球は多くの島嶼部を擁している関係から島嶼部との交流には船舶を必要とした。このため船舶による海難事故は決して少なくはなかった。その具体例が琉球船の中国大陸への漂着である。これら琉球船の漂着に関する史料としては、中国第一歴史檔案館が編集した『清代中琉関係檔案選編』[3)] などに見られる。同檔案には清朝の乾隆時代から光緒時代までの時期に琉球船の清朝中国へ漂着したものを多く数える。これら中国に漂着した琉球船に関しては、すでに田名真之氏[4)] が乾隆時代の事例を検討されたが、琉球諸島から中国へ漂流した琉球船が積載していた積荷の種類や数量ならび貨物の全般的な特性等については検討されていない。ところが中国へ漂着した琉球船に関する清朝檔案から、琉球船の様々な航運形態が見えてくる。清朝中国へ漂着した琉球船に積載されていた米穀や綿布そして芭焦布などから琉球国内におけるそれらの流通事情が知られるのである[5)]。

そこで本論文では、さらに清朝檔案を中心に琉球から中国への朝貢船では無い、清朝中国へ漂着した琉球船が、清朝側でどのような扱いを受けて救済され帰国したかについて検討してみたい。

二　清朝中国に漂着した琉球民間船

朝鮮やベトナムの人々が海難事故に遭遇して清朝中国へ漂着した難民達がどのように中国から救済されたかについては既に明らかにされている[6)] が、琉球の海難難民等が清朝中国側による救済についての概要は中国第一歴史檔案館の兪玉儲氏[7)] によって明らかにされたが、詳細な検討には本論文で述べるように余地が残されている。

琉球人の中国への漂着に関する記録は、中国第一歴史檔案館が所蔵する中琉関係史の檔案や『歴代宝案』に見られ、中国で救助された琉球の遭風難船の記録は極めて多い。清朝政府は琉球の飄風難民に対

---

2) 松浦章『清代中国琉球貿易史の研究』榕樹書林、2003年11月、第二章参照。謝必震『明清中琉航海貿易』海洋出版社、2004年３月、第一章参照。松浦章『清代中国琉球交流史の研究』関西大学出版部、2011年10月、第三章参照。

3) 『清代中琉関係檔案選編』（中華書局、1993年４月）の他に『清代中琉関係檔案續編』（中華書局、1994年５月）、『清代中琉関係檔案三編』（中華書局、1996年１月）、『清代中琉関係檔案四編』（中華書局、2000年９月）、『清代中琉関係檔案五編』（中華書局、2002年６月）、『清代中琉関係檔案六編』（中華書局、2005年３月）などがある。

4) 田名真之「琉球船的漂流・漂著――以乾隆期的事件為例――」、『第八回琉中歴史関係国際学術会議論文集』、琉球中国歴史関係国際学術会議編、2001年３月、119-140頁。

5) 岑玲、「清代檔案に見る琉球漂流船の積荷――米穀を中心に――」、『南島史学』、南島史学会、第75・76合併号、2010年11月、55-72頁。 岑玲、「清代檔案に見る琉球漂流船の積荷――綿布を中心に――」、『千里山文學論集』、関西大学大学院文学研究科、第84号、2010年９月、147-168頁。岑玲、「清代檔案に見る琉球漂流船の積荷――芭蕉布を中心に――」、『南島史学』、南島史学会、第77・78合併号、2011年12月、86-97頁。

6) 湯熙勇「清代前期中国における朝鮮国の海難船と漂流民救済について」、『南島史学』第59号、2002年８月、18-43頁。湯熙勇「清代中国におけるベトナム海難船の救助方法について」、『南島史学』第60号、2002年11月、38-56頁。

7) 兪玉儲「清代中国和琉球貿易初論（上）」、『歴史檔案』、1993年第03期。

して極めて重要視していたことがよくわかる。

琉球国の民間の船は規模も小さく、海洋航行に際して大きな波などに遭遇すると多くの場合、海難に遭遇する危険性が極めて高かった。その結果、中国沿海の福建、浙江、江蘇、台湾、山東、広東等省などの地域に漂着している。中国沿海部に漂着した琉球難民は、中国当地の官吏等によって救済され、病人にも治療が施された。もし死亡した者がいた場合には埋葬費用や、破損した船の修復の費用も提供されたことは兪玉儲氏が既に指摘されている[8)]。しかしながら、救済処置の具体的内容についての検討は十分ではない。

先ず清代中国に漂着した琉球民間船に関して、その船が乗員とともに帰国が可能であるか。または難破による破損のため乗船が不可能で、琉球からの朝貢船の帰帆に際して乗船して帰国した場合とに分けて考えて見たい。このように漂流琉球船及び漂流民がどのように帰国したかについて清朝檔案から帰国方法が判明する船を抽出し、一覧表にしたものが次の表１である。

表１　1737～1898年における琉球民間船の中国漂着と帰国方法一覧

西暦	中国暦	出帆地	目的地	漂着地	航海目的	人数	積荷	帰国方法
1737	乾隆２	太平山	那霸	定海青龍	運粗	36名	粟米等	自己船
1737	乾隆２	宮古山	中山	象山	運粗	10名	棉花等	自己船
1738	乾隆３	宮古島	中山	浙江高行		30名	小米等	不明
1746	乾隆11	中山	麻姑山	台湾彰化金包里	運漕進貢返	40名		不明
1748	乾隆13			福建北筊東洛灣	接貢船回国	118名		不明
1750	乾隆15	馬齒山	近海	淡水	打漁	４名		不明
1751	乾隆16	太平山	中山	台湾虎頭山	公務載米	19名	米	不明
1755	乾隆20	中山	太平山	廈門	納貢返棹	36名		自己船
1757	乾隆22	那霸	大宜保	象山	砍柴	５名		朝貢船
1759	乾隆24	那霸	馬雞山	江蘇羊山	販売柴薪	５名	柴薪	不明
1759	乾隆24	太平山	那霸	臨海	進貢	41名	米粟等	自己船
1759	乾隆24	麻姑山	那霸	玉環庁	運粗	13名	米、馬	自己船
1759	乾隆24	八重山	那霸	江蘇省阜寧	運粗	12名	粟米	別船
1760	乾隆25	中山	太平山	潮陽	運粗返棹	37名	皮箱等	自己船
1760	乾隆25	那霸	太平山	香山	納貢返棹	50名	行李等	別船（33名） 貢船（17名）
1760	乾隆25	屬島	中山	広東香山	売米換粗	17名	棉花	別船
1760	乾隆25	中山	太平山	定海	納粗返棹	42名	豆糖	自己船
1761	乾隆26	那霸	太平山	霞浦	運粗	９名	食米	不明
1761	乾隆26	泊村	麻姑山	定海	運粗	９名	食塩	別船
1761	乾隆26	泊村	太平山	平湖	運粗	15名	食塩等	自己船
1761	乾隆26	泊村	八重山	寶山	運粗	11名	雑薬等	別船
1761	乾隆26	泊村	麻姑山	寶山	運粗	10名	雑薬等	別船
1768	乾隆33	中山	八重山	広東徐聞	納粗返棹	22名		朝貢船
1770	乾隆35	八重山	那霸	浙江台州太平	運貢米	19名	米等	自己船
1770	乾隆35	八重山	中山	嘉興	運粗	40名	米粟等	別船

8）兪玉儲「清代中国和琉球貿易初論（下）」、『歴史檔案』、1993年第04期。

1770	乾隆35	八重山	那覇	象山	運粗	27名	米粟	自己船
1770	乾隆35	中山	八重山	広東電白	運貢米返	32名		不明
1772	乾隆37	那覇	八重山	福建亭頭怡山院	收粗	22名	鐵鍋等	自己船
1772	乾隆37	宮古島	多良間	淡水	逃荒歸里	117名		朝貢船
1773	乾隆38	那覇		象山	送米返棹	29名	板箱等	自己船
1774	乾隆39	那覇	八重山	溫州	運粗	21名	生鐵等	別船
1776	乾隆41	太平山	中山	奉化	納貢	47名	米粟等	自己船
1776	乾隆41	那覇	八重山	浙江溫州永嘉	貿易	24名	木料等	自己船
1779	乾隆44	久米島	中山	淡水	納貢	25名	貢米	朝貢船
1785	乾隆50	太平山	多良間	淡水	運粗	20名		朝貢船
1790	乾隆55	那覇	斉古府	江蘇蘇州府昭文	貿易	9名	鹽	別船
1790	乾隆55	那覇	宮古島	定海	運粗	10名	鹽	自己船
1790	乾隆55	那覇	宮古島	山東諸城	運送關鹽	16名	茶葉等	自己船
1790	乾隆55	八重山	那覇	江蘇贛榆	運貢米	23名	米等	別船
1790	乾隆55	宮古島	那覇	江蘇通州	運年貢	14名	粟米	自己船
1790	乾隆55	那覇	那姑呢	台湾	運貢米	16名		朝貢船
1791	乾隆56	那覇	德島	霞浦	給地方官送物	45名	藥材等	不明
1792	乾隆57	太平山	中山	江蘇太倉崇明	納粗	28名	小米	別船
1792	乾隆57	那覇	八重山	広東潮陽	運貢布返棹	38名	鹽	自己船
1793	乾隆58	麻姑山	那覇	江蘇通州	運年例	23名	粟麥等	別船
1793	乾隆58	八重山	中山	鎮海	運貢米	9名	米粟	自己船
1794	乾隆59	忍納府	泊縣	象山	売薪木返棹	5名		朝貢船
1794	乾隆59	八重山	中山	江蘇東台	運年例	27名	例米	朝貢船
1794	乾隆59	泊縣	砂川	樂清	運粗	9名	小米等	自己船
1794	乾隆59	与那島	八重山	太平	完粗	24名	大小米	不明
1795	乾隆60	那覇	大島	平陽	地方官送物	51名	沙糖等	自己船
1795	乾隆60	那覇	八重山	香山	運粗返棹	14名	米石	別船
1796	嘉慶元年	太平山	那覇	寧海	運粗	30名	粟米等	自己船
1796	嘉慶元年	八重山	中山	樂清	運粗	21名	粟米	自己船
1797	嘉慶2	八重山	中山	鹽城	運米返棹	9名		別船
1797	嘉慶2	那覇	宮古島	寶山	運粗	7名	藥材等	別船
1797	嘉慶2	八重山	中山	如皐	運貢米	8名	例米	別船
1797	嘉慶2	八重山	中山	鎮海	運粗	30名	米等	自己船
1798	嘉慶3	那覇	中山	閩安	運粗	15名	鹽等	自己船
1798	嘉慶3	八重山	那覇	山東即墨	運貢米	32名	米麥等	自己船
1799	嘉慶4	那覇	八重山	玉環	運粗	7名	米石等	別船
1799	嘉慶4	久米村	大島	象山	貿易	10名	芭蕉等	別船
1800	嘉慶5	太平山	中山	浙江平陽	納粗	26名	粟米等	自己船
1800	嘉慶5	泊津口	八重山	臨海	貿易返棹	12名	鹽等	別船
1800	嘉慶5	太平山	中山	鎮海	運粗	19名	米粟	自己船
1800	嘉慶5	宮古島	那覇	浙江太平	運粗返棹	14名		自己船
1802	嘉慶7	那覇	宮古島	永嘉	運鹽	14名	鹽觔	自己船
1802	嘉慶7	那覇	宮古島	臨海	運粗	9名		自己船
1802	嘉慶7	那覇	宮古島	臨海	運粗	11名		自己船
1802	嘉慶7	那覇	太平山	象山	催納租税	6名		別船
1803	嘉慶8	八重山	那覇	定海	貿易	11名	鹽等	自己船

1803	嘉慶 8	八重山	那覇	定海	自往戒米	10名	米粟等	自己船
1803	嘉慶 8	那覇	大島	江蘇崇明	換米	30名	黒糖	自己船
1803	嘉慶 8	那覇	鳥父世麻	臨海	貿易	48名	黒糖	別船
1804	嘉慶 9	宮古島	中山	上海	納糧	9名	粟米	自己船
1805	嘉慶10	那覇	八重山	象山	收貢米	10名	米物	自己船
1806	嘉慶11	那覇	北山	台湾大雞籠	販運火柴	16名		朝貢船
1806	嘉慶11	大島	那覇	福建烽火門	各島巡視	78名	海菜	朝貢船
1807	嘉慶12	久米島	中山	象山	納貢	13名	綢布等	不明
1807	嘉慶12	八重山	那覇	象山	運貢米	5名	貢米等	朝貢船
1808	嘉慶13	糸滿府	近海	象山	打漁	3名		朝貢船
1808	嘉慶13	西村	宮古島	臨海	運貢米	6名	茶葉等	朝貢船
1808	嘉慶13	泊村	宮古島	定海	運物	11名	鹽等	不明
1809	嘉慶14	那覇	大島	榮城	貿糧	52名	黒糖等	朝貢船
1810	嘉慶15	宮古島	那覇	台湾雞籠	納租	9名	粟穀等	不明
1810	嘉慶15	泊津村	宮古島	江蘇東台	催糧	13名		朝貢船
1810	嘉慶15	泊府	山原府	山東膠	買運薪木	7名	鹽	朝貢船
1810	嘉慶15	中山	麻姑山	台湾南路	奉差返棹	42名		不明
1811	嘉慶16	泊村	八重山	淡水	催貢米	12名		朝貢船
1811	嘉慶16	糸滿府	近海	閩安	打漁	8名		朝貢船
1812	嘉慶17	那覇	寶島	福建竿塘	奉差交納	38名	黒糖	自己船
1812	嘉慶17	北山	那覇	福建南日島	納米	3名	米	不明
1813	嘉慶18	那覇	八重山	台湾芝葩里	運米	9名	棉花等	朝貢船
1813	嘉慶18	姑米山	馬齒山	台湾金雞貂	捕漁	3名		朝貢船
1814	嘉慶19	那覇	八重山	臨海	運米	9名	鹽鐵	自己船
1814	嘉慶19	那覇	八重山	台湾鳳山	催糧	7名	鐵錠	朝貢船
1814	嘉慶19	大島	那覇	象山	巡☒	30名	黄豆	自己船
1814	嘉慶19	那覇	八重山	定海	売米粟	9名	米粟	自己船
1814	嘉慶19	喜界島	那覇	福建甫田	催糧	42名	米等	自己船
1815	嘉慶20	宮古島	那覇	台湾噶瑪蘭	催年例	19名	粟麥	朝貢船
1815	嘉慶20	芭蕉島	八重山	台湾鳳山	運糧	13名		自己船
1815	嘉慶20	那覇	太平山	定海	收米完漕	23名		自己船
1816	嘉慶21	八重山	那覇	海門	巡視返棹	23名		不明
1816	嘉慶21	八重山	那覇	如皐	運年貢	25名		不明
1816	嘉慶21	那覇	八重山	臨海	貿易	21名	烏糖	自己船
1817	嘉慶22	八重山	那覇	太平	棉兌米麥	7名	米麥等	自己船
1817	嘉慶22	八重山	那覇	福建連江	納糧	7名	大小米	自己船
1819	嘉慶24	那覇	麻姑山	定海	運糧	8名		自己船
1819	嘉慶24	姑米山	那覇	台湾雞籠	納糧	9名	小米	別船
1820	嘉慶25	那覇	邊戸村	台湾雞籠	納杉木返	8名		朝貢船
1821	道光元年	大島	那覇	山東膠州	運火柴	14名	火柴	朝貢船
1822	道光 2	那覇	太平山	定海	載米	22名	鹽等	自己船
1822	道光 2	八重山	那覇	定海		8名	米粟等	自己船
1822	道光 2	八重山	那覇	文登	運糧	7名	大米等	別船
1822	道光 2	太平山	那覇	定海	貿米	16名	粟米等	自己船
1822	道光 2	那覇	八重山	広東陽江	運年貢積米	6名		朝貢船
1823	道光 3	永良部島	由論島	霞浦	納糧返棹	4名	小麥等	不明

1823	道光3	那霸	屬島	崇明	巡哨	50名		朝貢船
1823	道光3	那霸	八重山	象山	運米	13名	米等	自己船
1823	道光3	西村	米島渡	定海	打造銅器	4名		朝貢船
1823	道光3	与那島	那霸	臨海	貿易	5名	真竹等	不明
1824	道光4	那霸	宮古島	福建白犬	運糧	10名		不明
1824	道光4	八重山	那霸	玉環	運糧	6名	米粟	不明
1824	道光4	八重山	那霸	定海	運糧	10名	粟米	自己船
1824	道光4	太平山	那霸	浙江北關	貿易	7名	粟米等	不明
1824	道光4	八重山	那霸	臨海	運貢米	9名	米	自己船
1825	道光5	中山	北山	文登	售柴薪	4名	柴薪	朝貢船
1825	道光5	姑米山	那霸	台湾噶瑪蘭	運糧	30名	糧米	朝貢船
1826	道光6	八重山	那霸	定海	運糧	19名	米等	不明
1826	道光6	宮古島	那霸	臨海	運糧	19名	糧米	不明
1827	道光7	管鈍村	那霸	浙江官山	買瓷器	6名		不明
1827	道光7	那霸	東角	臨海	運米	5名		不明
1827	道光7	那霸	宮古島	福建魁山外洋	納糧	13名		自己船
1827	道光7	八重山	那霸	鎮海	催年例	7名	米粟	不明
1828	道光8	那霸	名護	台湾琅嶠山	運薪米	14名	薪米	朝貢船
1829	道光9	那霸	頭島	定海	販兌薪木	5名	燒酒	自己船
1830	道光10	与那島	泊村	定海	催糧	3名	糧米	不明
1830	道光10	東村	宮古島	象山	採買松木	8名		不明
1831	道光11	那霸	屬島	桑城	趕集販賣	5名	黄牛等	不明
1831	道光11	那霸	大島	玉環	運送	31名	黑糖	自己船
1831	道光11	久米島	具志川	福建	運糧	10名		自己船
1832	道光12	太平山	北山	福建烽火營	貿易	6名	鹽	自己船
1832	道光12	八重山	中山	定海	運糧	11名	米等	自己船
1832	道光12	那霸	北山	噶瑪蘭	売薪木	4名	薪木	朝貢船
1833	道光13	那霸	渡名喜島	噶瑪蘭	販豬	10名		不明
1833	道光13	那霸	鳥父島	鎮海	巡視	59名	犒賞物	自己船
1833	道光13	那霸	宮古島	江蘇崇明	催糧	14名	鐵鍋等	不明
1833	道光13	八重山	泊村	定海	運糧	4名	糧米	自己船
1833	道光13	八重山	那霸	山東日照	催糧	11名	白米等	不明
1833	道光13	八重山	中山	定海	運糧	12名	糧米	自己船
1833	道光13	那霸	八重山	台湾噶瑪蘭	運送	5名	黑繩	不明
1835	道光15	那霸	八重山	閩安	運糧	18名	鹽斤等	自己船
1835	道光15	大島	那霸	福建漳浦	運糧	37名	米等	自己船
1835	道光15	那霸	北山	江蘇華亭	貿易	17名		不明
1835	道光15	八重山	那霸	定海	運糧	11名	米粟等	自己船
1835	道光15	八重山	中山	浙江太平	送年例	15名	布疋等	自己船
1835	道光15	八重山	那霸	象山	運糧	14名	糧米	別船
1835	道光15	八重山	那霸	臨海	運糧	18名	糧米等	自己船
1836	道光16	姑米山	中山	鳳山	交納	17名	柴木等	不明
1836	道光16	久米島	中山	台湾噶瑪蘭	運糧	36名	糧米等	不明
1838	道光18	那霸	八重山	台湾東港	催糧	14名	食鹽等	不明
1838	道光18	与那国島	八重山	浙江定海	納糧	17名	米粟等	不明
1838	道光18	八重山	那霸	象山	運糧	21名	米粟等	自己船

清代中国に漂着した琉球民間船の帰国方法（岑）

1838	道光18	八重山	那覇	定海	運粗	5名	米粟	不明
1838	道光18	那覇	国頭郡	陽江	運材木	8名	燒酒	不明
1839	道光19	那覇	屬島	定海	售売雑貨	13名	瓦器等	自己船
1840	道光20	那覇	宮古島	台湾鳳山	催粗	9名	食鹽等	自己船
1840	道光20	喜界島	那覇	台湾鳳山	催粗	26名	粗米等	朝貢船
1841	道光21	与那国島	那覇	浙江太平	催粗	6名	小粟米等	自己船
1842	道光22	糸滿邑	宮古島	江西涌山	打漁	10名		朝貢船
1842	道光22	那覇	北山	浙江玉環	運薪木	5名		自己船
1843	道光23	姑米島	那覇	福清	貿易	4名		朝貢船
1844	道光24	八重山	那覇	浙江太平	催粗	9名	粗米等	自己船
1844	道光24	宮古島	泊村	台湾噶瑪蘭	貿易返棹	7名	小麥	朝貢船
1844	道光24	八重山	那覇	山東膠州	催粗	20名	粗米等	朝貢船
1844	道光24	太平山	那覇	江蘇鹽城	催運粟布	18名	粗米等	朝貢船
1844	道光24	宮古島	那覇	象山	催粗納貢	17名	小米等	自己船
1844	道光24	那覇	葉壁山	定海	運柴	3名		自己船
1846	道光26	久米村	那覇	福建	貿易返棹	4名	草席等	朝貢船
1846	道光26	屬島	那覇	山東榮城	赴官完粗	8名	大米等	自己船
1846	道光26	那覇	太平山	山東海陽	催粗	5名		朝貢船
1846	道光26	宮古島	久米村	江蘇川沙	運粗	8名	粟米等	朝貢船
1846	道光26	宮古島	瀬田村	江蘇如皐	買辦米粟	5名		不明
1846	道光26	中山	那覇	江蘇阜寧	納粟歸	9名		自己船
1847	道光27	与那国島	那覇	浙江玉環	運粗	5名	粗米等	自己船
1847	道光27	宮古島	那覇	浙江定海	購粟麥等	6名	棉花等	自己船
1848	道光28	那覇	八重山	江蘇如皐	催運粗米	8名	食鹽等	朝貢船
1848	道光28	那覇	久米村	浙江玉環	貿易	6名	燒酒等	朝貢船
1849	道光29	中山	八重山	噶瑪蘭	納布返棹	41名	茶葉等	朝貢船
1850	道光30	与那原	頭島	霞浦	貿易	5名		自己船
1850	道光30	八重山	中山	定海	催粗	8名	米粟	自己船
1851	咸豊元年	八重山	那覇	鎮海	送官上任	16名	米粟等	不明
1851	咸豊元年	八重山	屬島	盛京	收取年貢	18名		不明
1851	咸豊元年	太平島	中山	太平	運粗	32名	貢粟等	自己船
1851	咸豊元年	那覇	読谷山	鹽城	貿易	4名		不明
1853	咸豊3	那覇	与那島	定海	催粗	7名		自己船
1853	咸豊3	宮古島	那覇	江蘇崇明	催粗	11名	小米	朝貢船
1854	咸豊4	那覇	太平山	福鼎	催粗	22名	靛青等	自己船
1854	咸豊4	八重山	中山	鎮海	運粗	16名	米粟等	朝貢船
1854	咸豊4	八重山	那覇	広東文昌	催粗	30名	粗米等	朝貢船
1854	咸豊4	那覇	八重山	広東省新寧	納粗返棹	56名	食鹽等	朝貢船
1855	咸豊5	八重山	那覇	象山	催運米布	38名	大米等	自己船
1857	咸豊7	那覇	八重山	淡水	催粗運米	9名		不明
1859	咸豊9	那覇	八重山	象山	催粗運米	7名		自己船
1860	咸豊10	太平山	多良間島	淡水	運布返棹	8名		不明
1860	咸豊10	那覇	宮古島	寧波	催粗	9名	砂糖等	朝貢船
1864	同治3	那覇	八重山	定海	催粗	6名	糖等	自己船
1865	同治4	那覇	久米村	浙江太平	貿易	7名	磁器等	自己船
1865	同治4	宮古島	那覇	福建長樂	催粗	28名	粗米等	自己船

1867	同治6	那覇	宮古島	定海	催糧	8名		自己船
1868	同治7	八重山	中山	鎮海	官員歸里	25名	糧米等	自己船
1868	同治7	大宮島	那覇	淡水	貿易	11名	蕉布等	不明
1869	同治8	那覇	姑米山	淡水	貿易	2名	茶油等	不明
1870	同治9	那覇	八重山	溫州	貿易	8名	煙草等	自己船
1871	同治10	中山	太平山	台湾鳳山	納糧返棹	69名		不明
1873	同治12	太平山	那覇	台湾鳳山	納糧返棹	9名		朝貢船
1874	同治13	那覇	宮古島	溫州	貿易	10名	靛青等	自己船
1874	同治13	那覇	太平山	江蘇崇明	運糧	11名		自己船
1875	光緒元年	太平山	那覇	溫州	貿易	11名	小米等	自己船
1875	光緒元年	中山	八重山	榮城	納賦返棹	25名	稻米	自己船
1876	光緒2		八重山	平湖	運糧	25名	食鹽等	自己船
1876	光緒2	太平山	那覇	如皋		14名		不明
1876	光緒2			象山		9名		不明
1877	光緒3	那覇	八重山	閩安	貿易	13名	柴木等	自己船
1877	光緒3	那覇		東台		10名	米粟	別船
1877	光緒3	那覇	太平山	浙江平陽	催糧	20名		自己船
1877	光緒3	那覇	伊平屋島	広東		5名	茶等	不明
1877	光緒3	那覇	太平山	定海	貿易	18名	粗茶等	不明
1878	光緒4	中山	八重山	広東		53名		不明
1879	光緒5	那覇	糸滿	福州	貿易	7名	沙糖	別船
1879	光緒5	那覇	伊江島	浙江玉環	公務	11名		不明
1879	光緒5	那覇	八重山	浙江平陽	運糧	16名		自己船
1879	光緒5	那覇	八重山	浙江太平	運糧	13名		自己船
1879	光緒5	那覇	久米島	福建	運糧	9名	米	不明
1879	光緒5	那覇	八重山	福建	運糧	9名	米	不明
1879	光緒5	那覇	八重山	浙江太平	催糧	13名	粮米等	自己船
1882	光緒8	八重山	福建	浙江寧波		11名		自己船
1882	光緒8	八重山	那覇	台州	貿易	32名	食鹽等	自己船
1882	光緒8	那覇		福建		13名		不明
1882	光緒8	那覇	福建	台湾淡水		6名		不明
1883	光緒9	那覇	太平山	台湾宜蘭	貿易	8名	鹽等	自己船
1883	光緒9	太平山		福建		9名	小米	不明
1883	光緒9	西表邑	八重山	浙江平陽	就医	9名		自己船
1883	光緒9	久米島		鎮海		10名		不明
1883	光緒9	那覇		福建		12名		不明
1884	光緒10	那覇		閩省平潭		10名		不明
1885	光緒11	八重山		浙江温州		11名		別船
1885	光緒11	久米島	那覇	定海	打漁	6名		別船
1886	光緒12	那覇	福建	広東、香港		7名		不明
1886	光緒12	那覇	八重山	福建厦門白犬	打漁	7名		不明
1886	光緒12	那覇		福建		10名		自己船
1886	光緒12	与那原		広東雷州	打漁	4名		不明
1889	光緒15	泊村		福建		8名		不明
1889	光緒15	那覇		福建泉州金門、湄州		9名		不明
1889	光緒15	讀谷山	福州	浙江玉環庁	公務	10名		自己船

1889	光緒15	那霸		福建		11名		不明
1889	光緒15	与那原		台湾		9名		不明
1889	光緒15	与那原		福建泉州金門		9名		不明
1890	光緒16	与那原	福州	浙江玉環	公務	11名		自己船
1890	光緒16	与那原		福建霞浦		7名		不明
1890	光緒16	八重山		定海	貿易	32名	牛等	自己船
1890	光緒16	与那原		定海		7名		不明
1890	光緒16			福建		13名		不明
1891	光緒17	泊津		福建		9名		不明
1891	光緒17	那霸		台湾基隆		11名		不明
1891	光緒17	那霸		福建		18名		不明
1891	光緒17	那霸	福州			8名		不明
1891	光緒17	那霸		広東		8名		不明
1894	光緒20	北山		台湾宜蘭		2名		不明
1894	光緒20	那霸		福建		8名		不明
1895	光緒21			泉州府惠安		13名		不明
1896	光緒22			福建		7名		不明
1896	光緒22			浙江温州		13名		不明
1898	光緒24		福州	浙江玉環	公務	2名		自己船

帰国方法：自己船＝琉球民が乗船し漂着した船を修復し、その船で帰国した場合。
朝貢船＝琉球国の進貢船の那覇への帰帆に同乗して帰国した場合。
別船＝自己船や朝貢船以外の船で帰国した場合。

表１から琉球国の漂流船がどのように帰国したかは、次の表２に示した。その表２をもとにグラフ化したのが図１である。

表２　琉球漂流民の帰国方法

帰国方法	件数	比例 %
自己船	111	41%
別船	28	10%
朝貢船	50	18%
不明	85	31%
合計	274	100%

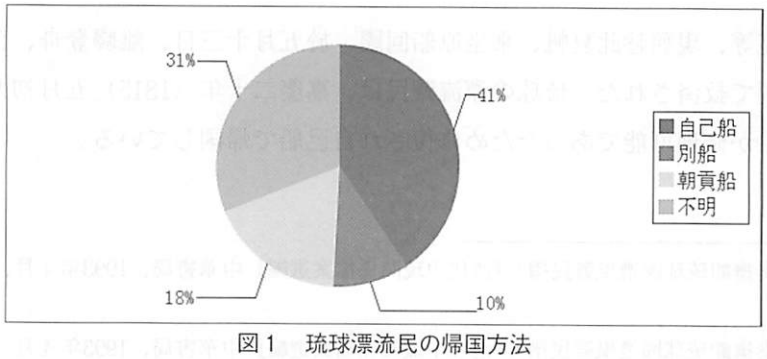

図１　琉球漂流民の帰国方法

表１に示したように琉球漂流民の中国から琉球国への帰国方法を整理すると274例を数える。この漂流琉球船の内、彼等が乗船してきた自己船によって帰国した琉球人等は111件で全体の41％になる。それに対して自己船では無く、別船に乗り帰国した琉球漂流民は28件で10％、他方那覇から福州に来航していた琉球国の朝貢船の帰帆に際して乗船して帰国した琉球漂流民は50件で18％になる。どのように帰国したかが不明の例が85件で31％となる。このように自己船に乗船して帰国した琉球漂流民はほぼ全体の半数を占めている。

そこで中国へ漂着した琉球船が、中国側の救済や船舶の修復などの援助を受けて、乗船していた船または別船か朝貢船で帰国した場合について検討してみたい。

三　清代中国へ漂着した琉球船の帰国方法

清代中国に漂着した琉球船及び乗組員がどのような方法で帰国したかは、上記したように主に三方法が知られる。そこでこれらの事例について詳細に検討したい。

１、漂流琉球船の自己船による帰国

乾隆三十七年（1772）四月十二日付の福建巡撫余文儀の奏摺[9]によれば、乾隆三十七年二月十七日に難風にあって、福建の亭頭に１隻の琉球船が漂着した。この船には琉球国の智汝沃等20人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の那霸で、琉球国の八重山へ米を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

> 至該夷等所坐原船破損無幾、應令自行修葺完固，派撥接貢船內熟識海道水梢、代為駕駛、遣發回國、詳情具奏前來[10]。

とあるように、中国で救済された。救助された琉球の漂流難民は、乾隆三十七年（1772）三月初九日に琉球館に護送された。そして原船が修理可能であったため修復し、那覇から来航していた接貢船の航路に詳しい乗組員が乗船し、彼等の案内により自己船で帰国している。

嘉慶二十年（1815）五月二十九日付の福建巡撫王紹蘭の奏摺[11]によれば、嘉慶十九年（1814）十月二十一日に難風にあって、福建の莆田県に１隻の琉球船が漂着した。この船には東士亮等42人が乗り組んでいた。彼等は琉球国の那霸人で、琉球国の喜界島から那覇へ米を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

> 今該難夷東士亮等、現願趁此夏帆、乘坐原船回國、於五月十三日、離驛登舟、自應俯如所請[12]。

とあるように、中国で救済された。琉球の漂流難民は、嘉慶二十年（1815）五月初九日に琉球館に護送された。そして原船が修理可能であったため修復され自己船で帰国している。

---

9)「福建巡撫余文儀奏撫卹琉球國遭風難民摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年４月、143頁。

10) 同書、143頁。

11)「福建巡撫王紹蘭奏撫卹琉球國遭風難民摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年４月、474頁。

12) 同書、474頁。

道光四年（1824）十一月十四日付の福建巡撫孫爾準の奏摺[13]によれば、道光四年（1824）七月初四日に難風にあって、浙江の定海県に１隻の琉球船が漂着した。この船は糸數等10人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の那霸で、琉球国の八重山から那覇へ米を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

糸數一起十名、據稱船已修理堅固、堪以原船駛回。仍各撥熟諳海道水梢二名、代為引導回國、均應如所請辦理[14]。

とあるように、中国で救済された。琉球の漂流難民は、道光四年（1824）十一月初一日に琉球館に護送された。そして原船が修理可能であったため、航路に詳しい水手２名が同乗し、修復した自己船で帰国している。

咸豐六年（1856）四月二十五日付の福建巡撫吕佺孫の奏摺[15]によれば、咸豐五年（1855）七月初二日に難風にあって、浙江の象山県に１隻の琉球船が漂着した。この隻は伊波等38人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の那霸である。この船は、琉球国の八重山から那覇へ米を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

其船隻已在浙省修葺堅固、堪以駕駛，照例選撥熟諳海道水梢二名、引導放洋回國[16]。

とあるように、中国で救済された。琉球の漂流難民は、咸豐六年（1856）二月初九日に琉球館に護送された。そして原船が修理可能であったので、修復した自己船に航路に詳しい２名の水手が同乗して帰国している。

同治七年（1868）十二月二十五日付の福建巡撫卞寶第の奏摺[17]によれば、同治七年（1868）六月二十一日に難風にあって、浙江の鎮海県に１隻の琉球船が漂着した。この隻は向文煥等25人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の那霸である。この船は、琉球国の八重山から那覇へ米を運ぼうとしていた。彼等が乗船していた船は、

該難夷等原船、已在浙省修理、查驗尚屬完固、堪以駕駛、惟不諳閩洋港道、將來回國、應撥熟悉船梢、引導出洋[18]。

とあるように、中国で救済された。琉球の漂流難民は、同治七年（1868）十月二十七日に琉球館に護送された。そして原船が修理可能であったので、修復した自己船に航路に詳しい水手を同乗させ帰国している。

光緒二年（1876）八月初七日付の浙江巡撫楊昌濬の奏摺[19]によれば、光緒二年（1876）閏五月二十一日に難風に遭遇して浙江省平湖の乍浦に１隻の琉球船が漂着した。この船には林克旺等25人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の那霸である。この船は琉球国の八重山へ米を輸送しようとしていた。彼

13）「福建巡撫孫爾準奏琉球國遭風難民循例撫卹摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年４月、611-613頁。
14）同書、611-613頁。
15）「福建巡撫吕佺孫奏撫卹琉球國遭風難民照例撫卹摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年４月、985-986頁。
16）同書、985-986頁。
17）「福建巡撫卞寶第奏琉球國遭風難民照例撫卹摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年４月、1064-1065頁。
18）同書、1064-1065頁。
19）「浙江巡撫楊昌濬奏琉球國遭風難民循例撫卹摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年４月、1106-1107頁。

等が乗船していた船は、

> 驗其船身、尚屬完整、惟大篷、船艄、鉄錨、绳索等項均已損失、當經給發口粮、加意保護、一面趕將船隻、購集工料修理完竣。……飭經由沿海水師、加意一體、妥為保護、逐程迎送赴閩、附便遣令歸國[20]。

とあるように、中国で救済された。琉球の漂流船は、帆柱等が破損していたが船体が完固であったため、修復を加え、沿海の水師の護衛のもとに、光緒二年（1876）七月十三日に福州へ護送された。そして修復された原船すなわち自己船で帰国している。

2、別船に乗り帰国した琉球船

乾隆二十六年（1761）六月初四日付の福州將軍杜圖肯の奏摺[21]によれば、乾隆二十五年（1760）十月初三日に難風にあって、広東の香山県に1隻の琉球船が漂着した。この船は大城等17人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の那霸であった。この船は琉球国の那覇へ綿花を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

> 原小船朽爛不堪，情愿就地變價……俟本國前次遭風難番黑嶋首里太屋子等船隻、脩葺完竣、附搭回國等情[22]。

とあるように、琉球難民が乗っていた船は、修復不可能であったため、中国で船の材木などを販売し、彼等は同様に中国に漂流していた漂流琉球民が乗っていた船で帰国している。

乾隆三十九年（1774）十一月二十三日付の福建巡撫余文儀の奏摺[23]によれば、乾隆三十九年（1774）三月十九日に難風にあって、浙江の永嘉県に1隻の琉球船が漂着した。この船には比嘉子等21人が乗り組んでいた。彼等は琉球国の那霸人であった。この船は琉球国の八重山へ米を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

> 所坐原船置造年久難以修葺、適有另案飄風難番須様智等、并崎山等兩船現在回國、情願分搭帶回，應令即行登舟[24]。

とあるように、修復不可能であったため、中国で船材などを販売し、彼等は同様に中国に漂流していた漂流琉球民が乗っていた船で帰国している。

嘉慶五年（1800）十一月十四日付の閩浙總督玉德の奏摺[25]によれば、嘉慶五年（1800）六月十六日に難風にあって、浙江の臨海県に1隻の琉球船が漂着した。この隻は雍松茂良等12人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の那霸であった。この船は琉球国の八重山へ貿易に赴くものであった。彼等が乗船していた船は、

> 船隻破損、不堪修整、業已就地變賣、由陸路護送來閩。……至該難番、將來遣發回國、應俟浙江太

20）同書、1106-1107頁。

21）「福州將軍杜圖肯奏琉球國飄風難民照例撫卹摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、83-84頁。

22）同書、83-84頁。

23）「福建巡撫余文儀奏撫卹琉球國遭風難民摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、163頁。

24）同書、163頁。

25）「閩浙總督玉德奏撫卹琉球國遭風難民摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、327頁。

平、鎮海二縣、另案漂收難番船隻到閩，驗看船身、酌量勻配、遣歸等情、詳請具奏前來。臣查該難番雍松茂良等、遭風流離、情殊可憫、現在飭司、加意撫卹、俟另案難番船隻到閩、酌量勻配、即行遣發回國[26]。

とあるように、琉球難民の船は修復不可能であったため、中国で船材などを販売し、彼等は同様に中国に漂着していた漂流琉球民が乗っていた船で帰国している。

道光二年（1822）十二月三十日付の福建巡撫葉世倬の奏摺[27]によれば、道光二年（1822）六月初十日に、難風に遭遇し山東の文登県に1隻の琉球船が漂着した。この船は知念等7人が乗り組んでいた。彼等は琉球国の那霸人であった。この船は琉球国の八重山から那覇へ米を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

并將破船及所剩大小米、樟木等項變價銀二百七十二兩零給領，由陸護送來閩……至將來回國先據存留通事懇請勻配浙江省送到難夷比嘉等三船內附搭同回，亦應如所請辦理[28]。

とあるように、修復不可能であった。そのため中国で船材などを販売し、彼等は同様に中国に漂流していた漂流琉球民が乗っていた船で帰国している。

光緒五年（1879）付の閩浙總督何璟等の奏摺[29]によれば、光緒五年（1879）閏三月初六日に難風に遭遇し、福州に1隻の琉球船が漂着した。この船には鄭精業等7人が乗り組んでいた。彼等は琉球国の那霸の人で、彼等は琉球国の糸満へ砂糖を販売に行った。彼等が乗船していた船は、

該難民等、現有別起球人金良福等六十一名之船隻、堪以附搭回國，據報於四月二十五日、離驛登舟、乘風放洋[30]。

とあるように、修復不可能であったため、中国で船材などを販売し、彼等は同様に中国に漂流していた漂流琉球民が乗っていた船で帰国している。

3、朝貢船に乗り帰国した琉球船

乾隆三十四年（1769）七月十二日付の署福建巡撫崔應階の奏摺[31]によれば、乾隆三十三年（1768）十月初九日に難風に遭い広東雷州府の徐聞県に1隻の琉球船が漂着した。この船は波座真等15人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の八重山で、琉球国の八重山から那覇へ米を輸送して帰帆する途中での漂流であった。彼等が乗船していた船は、

將船物變價、護送到閩……俟本年進貢摘回官伴船內、附搭歸國[32]。

とあるように、修理不可能であったために、船舶や積荷などを廣東省内で売却し、福州に送られ、福州に来航していた進貢船に乗り帰国している。

26）同書、327頁。

27）「福建巡撫葉世倬奏琉球國遭風難民照例撫卹摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、579頁。

28）同書、579頁。

29）「閩浙總督何璟等奏琉球國遭風難民循例撫卹片」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、1120頁。

30）　同書、1120頁。

31）「署福建巡撫崔應階奏琉球國遭風難民照例撫卹摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、118頁。

32）同書、118頁。

乾隆三十七年（1772）十一月十一日付の閩浙總督鐘音の奏摺[33]によれば、乾隆三十七年（1772）八月二十三日に難風に遭遇し台湾に1隻の琉球船が漂着した。この船には前泊等117人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の宮古島と多良間島で、琉球国の多良間島へ帰ろうとしていた。彼等が乗船していた船は、

至該難番原船桅舵板片、查已飄失，僅存破壞船底、難以修駕，現據該夷官議請，於現在接貢使便船，並俟來歲進貢船隻到閩分起、陸續遣發回國，並將破船底變價給領[34]。

とあるように、破損し修理不可能であったために、福州に来航していた接貢船と翌年の進貢船に乗り帰国している。

嘉慶十四年（1809）正月十八日付の福建巡撫張師誠の奏摺[35]によれば、嘉慶十三年（1808）閏五月二十二日に難風にあって、浙江の臨海県に1隻の琉球船が漂着した。この船は普天間等6人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の那覇で、琉球国の宮古島へ貿易に行ったものであった。彼等が乗船していた船は、

至該難番原船、據稱年久、不堪修葺、情愿就地變價，俟貢使回國附搭同回等情、詳請具奏前來[36]。

とあるように、永年航運に利用された船であったため修理不可能であった。そこで福州に来航していた朝貢船に乗り帰国している。

道光三年（1823）四月初二日付の兩廣總督阮元の奏摺[37]によれば、道光二年（1822）十月初三日に難風に遭い広東の陽江県に1隻の琉球船が漂着した。この船は錢化龍等6人が乗り組んでいた。彼等の出身は琉球国の那覇で、琉球国の八重山へ米を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

因船隻壞爛不能回國、稟蒙陽江縣估變價銀給領、並稱福建本年有琉球國貢船回國、可以附搭等情。臣查琉球國難夷錢化龍等、遭風漂粵、船隻壞爛、情殊可憫，本年閩省既有貢船回國、應將該難夷等委員、護送至閩，轉飭附搭回國[38]。

とあるように、修理不可能であった。その破損した船を廣東省の陽江縣で売却し、彼等は福州に送られ、福州に来航していた進貢船に乗り帰国している。

咸豊四年（1854）二月二十日付の閩浙總督兼署福建巡撫王懿德の奏摺[39]によれば、咸豊三年（1853）六月十二日に難風にあって、江蘇の崇明県に1隻の琉球船が漂着した。この船には西銘等11人が乗り組んでいた。彼等は琉球国の那覇で、琉球国の宮古島から那覇へ米を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

33）「閩浙總督鐘音奏撫卹琉球國遭風難民摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、147頁。

34）同書、147頁。

35）「福建巡撫張師誠奏撫卹琉球國遭風難民摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、400頁。

36）同書、400頁。

37）「兩廣總督阮元奏琉球國遭風難民漂流至粵委員護送閩省摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、582-583頁。

38）同書、582-583頁。

39）「閩浙總督兼署福建巡撫王懿德奏琉球國遭風難民照例撫卹摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、946-947頁。

原船被浪、擊散漂失……將來囲國、應搭接貢船隻歸國[40]。

とあるように、破壊され修理不可能であったために、福州に来航していた接貢船に乗り帰国している。

同治十二年（1873）六月二十八日付の閩浙總督李鶴年の奏摺[41]によれば、同治十二年（1873）四月初一日に難風にあって、台湾に1隻の琉球船が漂着した。この船は林廷芳等9人が乗り組んでいた。彼等は琉球国の那霸人であり、琉球国の太平山へ米を輸送しようとしていた。彼等が乗船していた船は、

漂至臺灣琅嶠海口、船隻冲礁擊破、……至該難夷等原船擊碎、已令附搭貢船回國[42]。

とあるように、難破によって破壊され修理不可能であったために、漂流民は台湾から福州に送られ、福州に来航していた朝貢船に乗り帰国している。

四　おわりに

琉球国は海洋国であったため船舶の交通は重要であった。このため海難事故は決して少なくなかった。その事例は先に掲げた管見の清代檔案を整理した表1からも明らかなように270余例を数える。これら中国への漂着した琉球漂流民は、いずれも漂着後に福建省に送られ、中国側の援助によって船を修理し、「原船」すなわち自己船で、或いは別船か琉球国の朝貢船に搭乗して帰国した。漂着船に積載していた荷物は清朝中国の漂着地か福州で購入された。さらに清政府は琉球難民に中国滞在中の食品、衣料や銀または銭を支給してくれた。このような琉球の漂流船に搭乗していた琉球の人々はどのような方法で帰国したかは次のようにまとめることが出来るであろう。

修理を受けて帰国した琉球船の場合　清朝中国は船大工を招集し、破損した琉球漂流船の修理に要する費用の見積もりを取り、修理するか否かを判断した。その結果、修復可能な場合、清朝中国から経費として銀両を給付し、修理に必要な材木をできる限り速く調達し、琉球漂流船の帆柱、風篷等を修理した。また琉球館に滞在中の琉球漂流民には毎日人数分の食料、銀両を支給された。船体の修復が修了すると、琉球漂流民は清朝中国から一ヶ月分の食料の給付を受けて自己船で帰国した。

しかし多くの琉球漂流民は帰国の水路について不明であったため、清朝中国は琉球朝貢船の乗員の中から、琉球への帰路の航路に詳しい水夫を時には2名を琉球漂流民の船に搭乗させ一緒に琉球国へ帰国させる方法をとったのであった。

別船で帰国した場合　清朝中国へ漂着した琉球船が破損し、修復不可能な場合は、漂流船の船材等は清朝中国が購入してくれた。漂流船に積載していた荷物についても、琉球漂流民の願いにより、清朝中国において売却するか或いは帰国する時に持って帰るかが撰択された。また琉球館に滞在中の琉球漂流民には、毎日人数分の食料、銀両が支給された。帰国時に琉球漂流民は、清朝中国から一ヶ月分の食料の給付を受け、同様に清朝中国に漂着していた漂流琉球民が乗っていた船に搭乗させ、この別船で琉球国へ帰国している。

40）同書、946-947頁。

41）「閩浙總督李鶴年奏琉球國遭風難民到閩循例撫卹摺」『清代中琉関係檔案選編』中華書局、1993年4月、1084-1085頁。

42）同書、1084-1085頁。

朝貢船で帰国した場合　漂流琉球難民が乗船していた原船が修理不可能であった場合、原船の船材等は清朝中国が購入してくれた。別船に搭乗できない場合の琉球漂流民の帰国は、福州に来航していた琉球国の進貢船か接貢船に乗り帰国している。また琉球館に滞在中の琉球漂流民に毎日人数分の食料、銀両を支給を受けている。漂流民の人数が多く、貢船１隻に難民全員が乗り切れない場合は、複数の船に分乗し、清朝中国から一ヶ月分の食料の給付を受けて琉球国へ帰国している。

以上のように、清代中国へ漂着した琉球民の帰国方法に焦点化して検討してきたが、清朝中国は、海難で中国へ漂着した琉球民を手厚く救済した。これは中華の皇帝が四夷の国々に対する柔遠の考えに基づくものであったが、琉球国もその一つの国として処遇された。漂流琉球船の本国送還に関して基本的には「原船」を修復させその自己船で帰国させたが、「原船」が修理できない場合は、他の琉球漂流民の船である別船、或いは朝貢船で帰国させたのであった。

（関西大学博士後期課程一回生）